乾乳期と未経産牛の乳房炎対策

乾乳期は、疲れた乳腺の回復時期であり、慢性乳房炎などは治療効果が高く、抗性物質製剤を用いて徹底的に治療できる時です。しかし、泌乳により乳房内の細菌を排除できない期間であるため、この期間に侵入した細菌を放置すると被害は大きくなります。

1．乳房炎対策からみた乾乳方法

乾乳期は、搾乳により乳房内の細菌を清浄できない時期です。乳房内に細菌を残したまま乾乳すると、分娩搾乳開始後の乳量低下が大きくなるので、乳房炎対策を考慮した乾乳が必要です。

搾乳を一度に止め乳房内圧を高めて泌乳を抑制する急速乾乳方法が推奨されています。これは、短期間で乾乳できるので感染の機会が少ないためです。ただし乳房炎感染が無い事を必ず確認しておく必要があります。

給与飼料を減らし、隔日搾乳して自然乾乳に近づける間欠乾乳方法もありますが、乳汁分泌のリズムが狂い乳頭口が長期間緩んでいるため乳房炎感染の機会が増えます。母牛や胎児に与えるストレスからみても、急速乾乳が好ましい方法です。

乳房炎軟膏や乾乳軟膏を注入したから安心と思うのは危険！
これらを注入しても必ず治るとは限らない。乾乳前には必ず治癒の確認が必要。

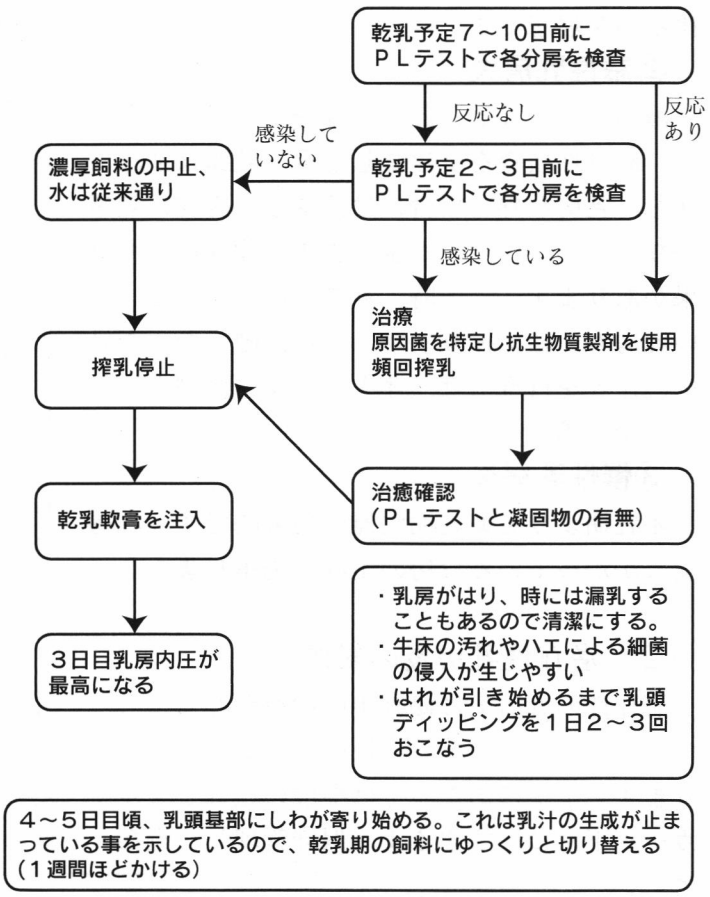

図１　乳房炎対策からみた乾乳方法

乾乳軟膏の使い方

慢性あるいは潜在性乳房炎の治療として乾乳期の抗生物質製剤(乾乳軟膏)の使用がかなり効果的です。一般的な使用方法を右に示しました。予防として乾乳牛全頭に乾乳軟膏を注入し乾乳しますが、不用な抗菌剤の使用による耐性菌が発生することがありますので、獣医師の指導のもとで適正に使用することが大切です。

乾乳軟膏の使用方法
- 慢性乳房炎は徹底治療の後に乾乳軟膏を使用する
- 潜在性乳房炎は、頻回搾乳、抗生物質製剤の使用の後注入する
- 分娩前に乾乳軟膏の持続効果が切れることがあるので、乳房の異常を観察する

2.乾乳期における感染と治療

乾乳作業が始まる頃から乾乳１週間までと、分娩前１４日～分娩直前までが、乳房炎に感染しやすい時期です。これは、乳房内に乳汁が溜まることにより内圧が高まり、これにより乳頭管が緩くなり長さも短くなるため、細菌が侵入しやすくなるためです。感染の予防としては、環境を清潔に保つ事が大切です。

乾乳期における乳房炎感染防止は、特に早期発見と治療が重要になります。病状の進行がはやく、発見治療が遅れると重度の乳房炎になり、盲乳になる場合もあります。

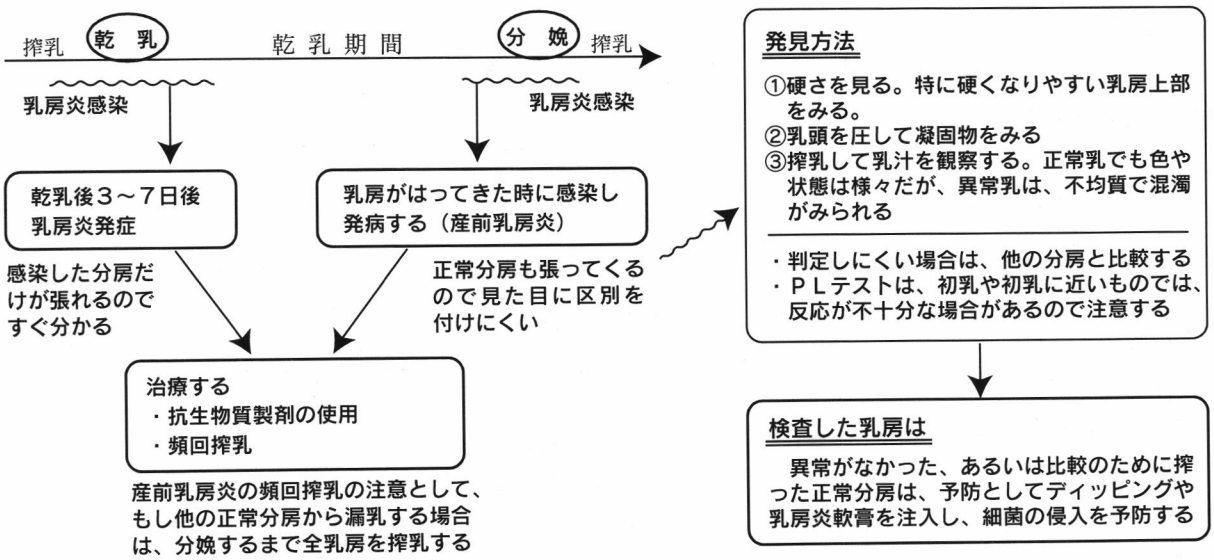

図２　乾乳期における乳房炎感染と治療方法

乾乳期の作業

乾乳治療あるいは、乾乳軟膏による予防を行っても、乳房炎が発症することがあります。治療や予防を行ったからといって安心して観察を怠ってはいけません。分娩後乳房炎による著しい乳量の減少により大きな損失を被る場合がありますので、乳房異常の確認が必要です。

・乾乳後７～１０日と分娩前１４日～分娩直前まで、乳房に触って大きさや硬さなど異常を確認する

3.未経産牛の乳房炎

原因は、乳房や乳頭の外傷、病牛や汚れた敷き料からの感染、吸血昆虫など外的な要因のほか、乳腺中にもともとあった細菌が猛暑などのストレスにより発症を引き起こすと考えられています。放牧中に急に発症する事が多いようです。

対策は、乳房の異常を常に観察し早期発見治療に努める事です。発見や治療が遅れると、著しい減乳や盲乳になることがありますが、早い治療により乳房を柔らかくすると分娩後の減乳を防げると言われています。

予防として子牛が乳頭を互いに舐め合うことを防いだり、ハエの駆除、牛床の定期的な清掃が大切です。

治療には、搾乳による菌の排除や抗性物質製剤を用いた全身治療などがあります。